

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 6 部門第 1 区分

【発行日】平成 17 年 9 月 8 日 (2005.9.8)

【公開番号】特開 2004-3962 (P2004-3962A)

【公開日】平成 16 年 1 月 8 日 (2004.1.8)

【年通号数】公開・登録公報 2004-001

【出願番号】特願 2003-16384 (P2003-16384)

【国際特許分類第 7 版】

G 0 1 N 35/00

G 0 1 N 33/52

G 0 1 N 35/04

// G 0 1 N 33/49

G 0 1 N 33/493

【F I】

G 0 1 N 35/00 B

G 0 1 N 33/52 B

G 0 1 N 35/04 E

G 0 1 N 33/49 G

G 0 1 N 33/493 B

【手続補正書】

【提出日】平成 17 年 3 月 16 日 (2005.3.16)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】特許請求の範囲

【補正方法】変更

【補正の内容】

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

検体が点着された乾式分析素子を収容して所定温度に恒温保持するインキュベータにおいて、

前記乾式分析素子を両側から挟む少なくとも一方が接離移動可能な一对のブロックと、一方のブロックに設置されたヒーターとを備え、

前記乾式分析素子を収容する前に、前記ヒーターを備えた一方のブロックと他方のブロックとを接触させ、他方のブロックを予熱することを特徴とするインキュベータ。

【請求項 2】

前記一对のブロックが上ブロックと下ブロックであり、該下ブロックに前記ヒーターを設置して温度調整し、前記下ブロックと前記上ブロックとを接触させ、該上ブロックを伝熱により予熱し、前記下ブロックと前記上ブロックとの間に乾式分析素子を収容した後、前記下ブロックと前記上ブロックとの間で乾式分析素子を挟み、両ブロックの熱によって乾式分析素子を加熱することを特徴とする請求項 1 に記載のインキュベータ。

【請求項 3】

前記乾式分析素子は、検体のイオン活量を測定する電解質タイプの乾式分析素子であり、前記一对のブロックの接離移動可能な一方に電位測定用プローブが設けられていることを特徴とする請求項 1 または 2 に記載のインキュベータ。

【請求項 4】

金属材料よりなり、前記上ブロックを覆うカバーをさらに備え、該カバーの上ブロックと接触する部位に断熱材が設置されてなることを特徴とする請求項 2 に記載のインキュベータ。

【請求項 5】

前記カバーの断熱材に凹部が形成されてなることを特徴とする請求項 4 に記載のインキュベータ。

【請求項 6】

前記他方のブロックを予熱する予熱時間を、環境温度に応じて変更することを特徴とする請求項 1 に記載のインキュベータ。

【手続補正 2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0012

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0012】

【課題を解決するための手段】

本発明のインキュベータは、検体が点着された乾式分析素子を収容して所定温度に恒温保持するインキュベータにおいて、

前記乾式分析素子を両側から挟む少なくとも一方が接離移動可能な一对のブロックと、一方のブロックに設置されたヒーターとを備え、前記乾式分析素子を収容する前に、前記ヒーターを備えた一方のブロックと他方のブロックとを接触させ、他方のブロックを予熱することを特徴とするものである。

【手続補正 3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0013

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0013】

具体的には、前記一对のブロックが上ブロックと下ブロックであり、該下ブロックに前記ヒーターを設置して温度調整し、前記下ブロックと前記上ブロックとを接触させ、該上ブロックを伝熱により予熱し、前記下ブロックと前記上ブロックとの間に乾式分析素子を収容した後、前記下ブロックと前記上ブロックとの間で乾式分析素子を挟み、両ブロックの熱によって乾式分析素子を加熱するように構成するのが好適である。

【手続補正 4】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0014

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0014】

前記乾式分析素子は、検体のイオン活量を測定する電解質タイプの乾式分析素子であり、前記一对のブロックの接離移動可能な一方に電位測定用プローブが設けられているものが好ましい。

【手続補正 5】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0016

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0016】

一方、前記他方のブロックを予熱する予熱時間を、環境温度に応じて変更することが好ましく、環境温度が低いときには、予熱時間を長く設定する。